

論文

キリスト教紙芝居を通して聖書の人物を子どもに語る視点とは
—ペテロを扱った作品について—

柴田 智世

1. 研究の目的

本研究では、イエスの12人の弟子の一人であるペテロを扱った紙芝居を取り上げる。聖書では、ペテロは人間味豊かに、長所も弱点も含めつつ、信仰の歩みが描かれている人物として登場している。

本稿では、保育者や学生がキリスト教紙芝居を福音的に理解すること、そして子どもたちに語っていくために、作品の内容を詳細に分析していくことを行う。

2. 研究の方法

本研究では、イエスの弟子であるペテロを扱った紙芝居を3作品を取り上げる。各作品の内容及び特徴を考察し、更に聖書の註解書に基づいて、福音のメッセージを探る。

3. 結果

各作品について場面ごとの分析を行った。それらを次の表に示す。

作品1. 「イエスさまに会ったペテロ—ペテロ(1)」文・久山隼児、絵・藤本四郎

キリスト教視聴覚センター、1986年

[聖書箇所 ヨハネによる福音書第1章35～42節、マルコによる福音書第1章29～31節、マタイによる福音書第14章22～33節、マルコによる福音書第9章2～29節]



〈図版①〉



〈図版②〉

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	<p>弟のアンデレと兄のシモンの2人の会話で始まる。アンデレは、昨日救い主に出会ったことを、興奮気味にシモンに話す。</p>	<p>⇒弟のアンデレは、救い主に出会ったことを、心から喜んで兄のシモンに伝えようとしている。兄を救い主に会わせたいという期待に満ちた躍動感が伝わる。</p>
2	<p>弟アンデレは、イエスのもとに兄シモンを連れて行く。初めての面会にもかかわらず、イエスはシモンにペテロという新しい名前を与え、イエスと一緒に神のために働くようにと命ずる。</p>	<p>⇒弟アンデレは意気揚々とした態度で、イエスに兄シモンを紹介する。 兄シモンは、おずおずとした様子でイエスと話をする。そして、イエスに言われた通り、魚をとる仕事を辞めてイエスの弟子として働くことになる。</p>
3	<p>幾日か後、イエスがガリラヤに行く途中で、ペテロは自分の家にイエスに泊まることを勧める。 ところが、同居のおばあさん（ペテロの姑）が高熱を出しており、イエスの宿泊をやむを得ず断ることになる。しかし、イエスはおばあさんの部屋に案内するようとペテロに申し出て、その場で病床のおばあさんの病を癒す。</p>	<p>⇒ペテロは、イエスがおばあさんの高熱を治したのを目の当たりにして驚き、イエスはやはり救い主であることを受け入れる。 イエスによって病人が回復し、それをペテロとアンデレが心から喜ぶ姿が絵に生き生きと描かれている。</p>
4	<p>場面が変わり、イエスの指示に従い、弟子たちだけで舟に乗って向こう岸に渡ろうとする。しばらくして日が暮れ、強い風が吹き出す。その時、舟の後方の湖上に、白いものが見え、舟に近づいてきた。</p>	<p>⇒強風により、弟子たちが乗った舟が進まなくなり、一同は非常に心配になる。また、白いものが動いているのが見えると、皆は幽霊ではないかと怯える。危機的な様子である。</p>
5	<p>白い物の実態は、イエスであることが分かる。イエスの「わたしです。怖がることはありません。」の言葉に一同は明るい声になる。ペテロは、自分もイエスのように水の上を歩き始める。(図版①)</p>	<p>⇒ペテロは自らイエスに申し出て、自分も水の上を歩き始める。イエスを信じる彼の信仰が表れている。読者である子どもにも、難しいことに挑戦してみたいという果敢な生き方を示すのではないかと思われる。</p>
6	<p>その時、強風が吹き、ペテロは沈みそうになりイエスに助けを求める。イエスは「なぜ、わたしから目を離して波を見たのだ。わたしの言ったことを信じないのか。」とペテロを叱る。</p>	<p>⇒ペテロの人間らしく正直な人柄が描かれている。 私たちの現実がいかに危険であり、不安であろうとも、イエスを信じ通すことの大切さを伝えるメッセージとして受け止めることができる。</p>

7	<p>場面が変わり、ペテロ、ヤコブ、ヨハネがイエスに従って高い山に登る。頂上に着くとイエスの顔が輝き、衣は光のように白くなる。突然、モーセとエリヤが現れてイエスと話をしている。そして、急にまぶしい白い雲が出てきて、みんなを包む。</p>	<p>⇒ペテロたちは、イエスの神聖な変貌や、モーセとエリヤの出現に非常に驚く。</p>
8	<p>天からの声が聞こえ、弟子たちは恐ろしくなり、ひれ伏す。するとイエスが怖がらずに起きるようにと諭す。</p>	<p>⇒弟子たちが天の声に対し、非常に恐れる様子が伝わる。その後のイエスの言葉は、対照的に明るくい口調のように表現されている。</p>
9	<p>場面が変わり、山を下りると、一人の男の人がイエスの姿を見つけて走ってきて、病気の息子を治してほしいと頼んできた。</p>	<p>⇒病気の子どものを何とかして直してほしいという、父親の切実な思いが伝わる。</p>
10	<p>父親は息子の病状をイエスに話し、すぐに治してほしいと懇願する。イエスは「わたしを信じる人には何でもしてあげられます」と断言する</p>	<p>⇒父親の話から、息子の病状は大変重篤であることが分かる。父親はイエスの言葉に迷うことなく「信じます!」と告白する。</p>
11	<p>イエスは連れて来られた子どもを見て、力強い声で悪霊が出ていくよう祈りの言葉を宣言する。すると、悪霊が子どもの中から出ていき、元気に回復した。(図版②)</p>	<p>⇒イエスが子どもの傍にひざまずいて手を取り、優しいまなざしで見つめている。父親の喜ぶ笑顔と、弟子や人々が驚く様子が描かれている。子どもが癒されたというこの場面は、読者の子どもにも安堵感を与えるとともに、感情移入をする子もいるであろう。</p>
12	<p>同じ日の場面であり、イエスと弟子たちが夕食の食卓を囲んでいる。イエスは、弟子たちに神様を心から信じて祈ることの大切さを語る。</p>	<p>⇒ペテロをはじめ弟子たちは、どのようなことでも信じて祈ることの大切さをイエスから教えられ、イエスが真の救い主であることを心に強く留める。</p>

考 察

この作品には、ペテロの召命、ペテロの姑の癒し、海の上を歩くペテロ、山上でのイエスの変容、てんかんの子どもの癒しの5つの話によって構成されている。これらの中でペテロは、イエスが神の子であることを信じようとしながらも信じられず、イエスの忍耐強い導きによって、次第に疑いに打ち勝っていく様子が示されている。

作品の中に5つの話が盛り込まれているため、話の展開が早い。子どもの前で読む時には一つずつの場面や状況、登場人物の思いをじっくり味わいながら、時には保育者が言葉を補いつつ、丁寧に読み語ることが必要であると思われる。

その際、ペテロの言動や性格に着目して、子どもがペテロの気持ちを感じ取ることが大切で

ある。この聖書の話を通して、誰でも神を求めて信じようとするならば、神に出会うことができることを表現している作品であることが分かる。

最後の12の場面では、これまでの数々の出来事を振り返るように、イエスは弟子たちに、神を信じて祈るようにと語っている。ペテロは、確かにイエスは本当の救い主であると心から信じ、話が締めくくられる。

作品2. 「わたしは知らないーペテロ (2)」文・久山隼児、絵・藤本四郎

キリスト教視聴覚センター、1986年

[聖書箇所 ヨハネによる福音書第6章22～69節、第13章1～38節、第15章12節、第18章1節～27節、ルカによる福音書第22章31～62節]



〈図版③〉



〈図版④〉

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	イエスは、病気の人を治したり、神のことを分かりやすく人々に伝えていたが、それでも人々は、イエスが本当の救い主として信じることができずにいた。しかし、イエスは自分が天からのパンであるとはっきり断言する。	⇒イエスを囲むようにして大勢の人が集まっている。イエスを軽蔑するように内緒話をする者や、イエスに面と向かって天からのパンを欲しいと申し出る者がいる。
2	イエスの「私の肉はまことの食物、私の血は、まことの飲み物です」の言葉に人々は口々に反論し、嘲りの言葉を浴びせる。弟子でさえも、イエスから離れてくる者も増えてきた。	⇒イエスの言葉の意味をそのまま受け止めることは、人々にとっては理解しがたい。そのため、反論する人の気持ちも読者に伝わる。イエスを睨んでいる人々が威圧的に描かれており、重たい空気が感じられる。 ⇒弟子を代表して述べたペテロの言葉に、イエスと弟子たちとの緊張感が解かれる。ペテロの信仰心が強く表現されている。
3	イエスは12人の弟子に対して、「あなたがたも私から離れていくのかね」と尋ねる。しばらくの間後、ペテロが、イエスこそ救い主であり、自分たちはどこへも行かないと答える。	⇒12人がテーブルを囲み、歓談をしながらイエスを待っている。

4	イエスと12人の弟子との過越の食事をする場面である。弟子は全員着席したが、イエスはまだ来ていない。	⇒イエスは優しい言葉をかけ、弟子の足を洗う。ペテロはイエスの状況にげんそうな表情で、足を洗わないでほしいと言う。本来、足を洗うのは使用人の仕事であるため、躊躇した弟子たちの気持ちがよく分かる。
5	イエスが水の入ったたらいを持って部屋に入ってくる。今から一人ずつ弟子の足を洗う場面である。弟子たちやペテロは非常に驚くが、イエスに足を洗ってもらう。(図版③)	⇒イエスとの師弟関係を続けていくためにも、足だけでなく手も頭も洗ってほしいと願う態度は、ペテロの正直で人間味のある人柄が出ている。
6	イエスの「もし、私に足を洗わせないなら、あなたは私の弟子ではなくなる」という言葉に、ペテロは慌ててそれなら足だけでなく、手も頭も洗ってほしいと、申し出る。	⇒それに対し、ペテロはイエスのためなら死んでも構わないので、一緒にイエスの行くところに行かせてほしいと懇願する。思ったことをすぐに口にするペテロの性格が感じ取ることができる。 ペテロは心外な様子で「そんなことは決して言わない」と答える。この食事の場面は終わる。
7	洗足の後、一同は食卓につく。イエスは、暫くすると自分は弟子たちと別れることになるが、イエスが彼らを愛したように、互いに愛し合いなさいと言う。 イエスは、ペテロに「明日の朝、鶏が鳴く前に、私のことを知らないと、必ず3回言う」と冷静に言う。	⇒ペテロが必死でイエスを守ろうとする姿が伝わる。
8	食事が終わり、イエスと弟子たちはゲッセマネに行く。そこへ兵隊たちがやってきて、イエスを捕えようとし、ペテロはイエスを守ろうとするが、イエスは縛られて大祭司の屋敷に連行される。	⇒ペテロはイエスの行方が心配で、後ろをつけて行ったのだろう。しかし、門番からの質問には嘘をついてしまう。保身のためなのだろうが、ペテロの弱さを読み取ることができる。
9	その後、ペテロはもう一人の弟子と一緒にイエスの後をつけて行く。門の入り口で、門番から「あなたは捕まえられた人の弟子でしょう」と尋ねられるが、ペテロは違うと答える。	⇒ペテロは、自分がイエスの弟子であることを、他の人々に知られたくないため、このような言動をとったのであろう。
10	その後、ペテロは上着で顔を隠すようにして、たき火で暖をとる。そこへ	⇒ペテロはイエスのことが気になりながらも、自分は慌ててイエスのことは知らないと兵隊に

	<p>女の人が薪を持って来て、「この人はイエスの弟子である」と自信をもって言う。ペテロは「違う。私はイエスという人を知らない」と答え、その場を立ち去る。</p>	<p>言う。もしも、自分が仲間であることを正直に言ってしまうと、自分も捕まえられることを恐れたのであろう。 ⇒二人の弟子の間にイエスが現れ、イエスは自分が蘇ったことを、力強い声で明言する。</p>
11	<p>ペテロはたき火にあたりながら、建物の中で取り調べを受けているイエスの様子を伺っている。ペテロは、突然、兵隊から「この人はイエスの仲間の一人だ」と言われる。ペテロは慌てて否定する。 昨夜のイエスの言葉通り、近くで鶏が大きな声で鳴く。 縄で縛られたイエスが振り向いて、ペテロをじっと見る。</p>	<p>⇒ペテロはイエスに背信し、緊迫した表情と、イエスが振り向いたまなざしが対照的に描かれている。</p>
12	<p>ペテロは、昨日の夕食でのイエスの言葉「あなたは鶏が鳴く前に、3回私のことを知らないと言う」を思い出す。そして、屋敷の外に出て自分の犯した失敗を悔いて泣く。(図版④)</p>	<p>⇒ペテロは、以前は命を捨てても、イエスについて行くと言っていたが、できなかった。そればかりか、自分がイエスのことを知らない、仲間ではない、弟子ではないと言ってしまったことを悔やんで泣いている。</p>

考 察

本作品において、3の場面におけるイエスの弟子への質問は、現在、この紙芝居を観ている読者にも同じ問いかけとして捉えられる。イエスは自分が近い先、捕らえられることを予感しつつも、個々の読者に考える余地を与えている。イエスの言葉を受けて、直後にペテロが信仰告白をする場面では、ペテロの凛とした態度に読者は安心感を得るであろう。イエスを信じている読者であれば、自分もペテロと同じ気持ちをもつ者も少なくないと思われる。しかし、紙芝居の話はペテロの言葉とは対照的に展開していく。

ペテロは、見方によってはイエスを裏切った者、言動が伴わず意志が弱い者であると、読者である子どもは単純に理解するかもしれない。この点について、本作品の解説欄には「人間の決心や純真さのもろさを知るべき」と書かれている。この点については、読み手である保育者が子どもに対して、適切な説明を補うことが必要であろう。

同じく、解説欄には「鶏が鳴いた時に、振り向いてペテロをご覧になったイエスの目は、彼を責める目ではなく、憐れまれる目である」と記述されている。これは、自分を傷つけた人に対し、裁きの心や敵対心をもって相手を見るのではなく、イエスに倣って愛と赦しのまなざしで見るということを、この場面でイエスは実践しているとも考えられる。

最後の12の場面は、泣いているペテロに焦点が当たり、余韻を残した結末であることが特徴的である。このペテロの複雑な心情を、子どもがイメージすることもできよう。また、ペテロの存在やこれまでの彼の言動の全てをイエスは受けとめていることから、ペテロだけでなく、全ての子どもや人間が愛されていることに読者が気づくことも本作品の意図であると思われる。

作品3. 「わたしの羊を養いなさいーペテロ(3)」文・久山隼児、絵・藤本四郎

キリスト教視聴覚センター、1986年

〔聖書箇所 ヨハネによる福音書第20章1～23節、第21章1～17節、使徒行伝第2章1～41節〕



〈図版⑤〉



〈図版⑥〉

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	イエスが十字架上で亡くなってから3日目の朝である。弟子たちは部屋の中に集まり、今度は自分たちが捕らえられるのではないかと心配している。そこへ、突然マグダラのマリアがやって来る。	⇒弟子たちは、深刻な表情で集まり座っている。誰も会話をしようとせずに、重々しい顔つきで黙っている。
2	マリアは、今朝お墓に行ったところ、中が空になっていたこと、蘇りのイエスに出会ったことを、弟子たちに話す。それを聞いて、ペテロとヨハネは墓に向かって走り、後ろからマリアもついて行く。	⇒マリアの興奮した様子や、話の内容から、一体、何事が起きたのかという空気が漂う。
3	墓に着いた3人は、中の様子を確認するが、イエスの姿は見当たらない。	⇒3人は恐る恐る墓の中を見ている。イエスを葬る際に使われた白い布だけは、そこに置かれている。
4	ペテロとヨハネは、マリアに対して「今朝、あなたが一人で来た時と同じ状態なのか」と改めて尋ねる。(図版⑤)	⇒3人は、この不可解な出来事をどのように受け止めたらいいいのか、理解できない様子である。
5	その日の夜、弟子たちはこの事態について話し合うが、全く答えが出ない。それ以上に、話の冒頭にもあったように、ユダヤ人たちが自分たちを捕まえに来るのではないかと不安に襲われている。	⇒頭を抱える者、座り込む者、腕組みをして下を向く弟子たちの様子から、暗く絶望的な場面である。

6	<p>弟子たちの前に急にイエスが姿を現す。イエスは威厳をもって、この蘇りの事実を世界中の人たちに知らせるようと述べると、その場から姿を消す。</p>	<p>⇒これまでの暗い雰囲気が一気に明るくなり、イエスの現れによって弟子たちは大喜びをする。イエスの手と脇の傷跡を見て、間違いなく本物のイエスであることが分かる。</p>
7	<p>それからしばらくたってから、ペテロを含む数名の弟子たちは魚を捕るために漁に出る。一晩中頑張ってみたものの、一匹すら網にかからない。皆は諦めて帰り始めようとする。</p>	<p>⇒場面は変わり、弟子たちの通常の生活に戻る。</p>
8	<p>その時、どこからか「舟の右側に網を下ろしなさい。」という声が聞こえる。言われた通りに網を投げると、たくさんの魚が網にかかった。</p>	<p>⇒ヨハネは、この声はイエスではないかと、確信をもってペテロに言う。</p>
9	<p>漁を終えて岸に着き、真ん中に焚き火を囲んで、イエスと弟子たちが食事を摂っている。 イエスは、ペテロに対して「あなたはここにいる誰よりも私を愛するか」と答え、ペテロはおどおどしながらも「はい、愛しています」と答える。</p>	<p>⇒穏やかで温かな食事の場面である。イエスとペテロの間答は、2回続く。また、イエスは、「私の子羊を養いなさい」とペテロに言う。</p>
10	<p>イエスとペテロの間答が計3回繰り返される。ペテロは、かつてイエスのことを知らないと3度言ったことを思い出して心配になるが、自分はイエスを愛していると答える。</p>	<p>⇒イエスのペテロへのまなざしには、大きな愛が感じられる。</p>
11	<p>イエスが蘇ってから50日後、エルサレムで弟子たちは人々の前で福音を宣べ伝える。特に、ペテロは大きな声でイエスの復活を語る。人々も真剣な表情で話に耳を傾けている。(図版⑥)</p>	<p>⇒かつては、弟子たちは部屋の中で怯えていたが、神様から不思議な力を頂いて、自信をもって語るようになる。</p>
12	<p>群衆たちからは、神の罰を受けないためにはどうしたらよいかとの質問が挙がる。それに対して、ペテロは、「悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けるならば、救われる」と力強く述べる。 この日、ペテロの話聞いて3,000人が悔い改めた。</p>	<p>⇒この質問から、群衆たちの心から神に従いたいという純粋な気持ちが伝わる。 神様から力をもらったペテロは、人が変わったようである。 最後の絵は、ペテロが大きく描かれている。何の迷いも疑いもなく、福音を語る堂々とした彼の姿は、読者に訴えかけるものがある。</p>

考 察

先の作品2「わたしは知らない」ペテロ(2)から、本作品に話が繋がっている。ペテロは、「イエスを知らない」と言ってしまったことから、イエスに対して合わせる顔がなかったと思われる。しかし、マグダラのマリアからの知らせを受けて、ペテロは大急ぎで墓に駆け付ける。

場面9、10において、イエスはペテロに「ここにいる誰よりも私を愛するか」と尋ねる。ペテロを含め、弟子たちの主への愛の大きさを計ることは難しいことである。それを理解した上でイエスはこの問いを3度も繰り返したのである。

紙芝居のケースの目標欄には、「主イエスの死によって絶望のふちに沈んでいたペテロが、主の復活を信じ、他の弟子たちの先頭に立って、主の復活の証人に成長するまでの心の移り変わりを考え、背後にある主の愛を指し示す」との記述がある。作品2の結末でペテロは、保身とはいえ愛するイエスを裏切ってしまったことへの後悔と罪悪感などの複雑な感情を抱えて話は終わっている。しかし、ペテロは自分の罪を認め、死から復活したイエスを信じたことにより、聖霊の働きを受けて、堂々と福音を宣べ伝える人と成長する。解説欄にも書かれているように、このペテロの心の変化の経緯を、読み手は作品2から作品3にわたって十分に理解した上で語る必要があると思われる。

解説欄には、これらの聖書の箇所を勉強して、ここで取り上げたこととは違う理解のあることを知って、より豊かな恵みを受けるようにとの指示があり、興味深く思われる。その一つは、ヨハネ20:22～23の「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」というイエスの言葉である。紙芝居では、「聖霊」という教理的な言葉を避け、子どもに分かりやすくするため、「神様からの力」という表現を用いていることは、未信者の大人にとっても理解しやすい。

なお、本作品の分析について、すでに柴田(2019)において取り上げられた経緯があるが、その際には紙芝居に登場する羊に着目して分析を行った¹⁾。今回の分析は、ペテロに視点を置き、同じ作品であっても角度の異なった分析を行った。

4. 考察とまとめ

筆者は、これまでの一連の福音紙芝居研究(尾上・柴田2014、2015、柴田2016、2019)において、聖書の理解をより深める方法として、レギーネ・シントラー著「聖書物語」における分析を行ってきた。本研究においても同様に用いることとした。この中に、今回の紙芝居の内容と共通する箇所が取り上げられている。

本著において、1つ目に「大祭司の屋敷で」というテーマで、マタイによる福音書26章57～75節を取り上げている。捕らえられたイエスの後を追って、ペテロだけは大祭司カイアファの屋敷へ様子を見に行く場面である²⁾。

その場に居合わせた召し使いと家来たちが、中庭に集まってイエスのことを話題にしている。これらの会話は、聖書箇所をさらに詳しく表現した記述であり、当時の状況が十分に想像できる。また、召し使いと家来の会話から、かつてはイエスが民衆から敬われてお

り、それによって祭司や律法学者たちの妬みとなったという経緯が理解できる。

ペテロは柱の陰で、彼らの話の内容に興味津々な様子で、息を潜めるようにして、聞き耳を立てている。ペテロの姿に気づいた召し使いから、「あんたも、あのイエスっていう人の仲間だったんじゃない？」と指摘されて、ペテロはイエスとの関係をきっぱりと否定する。かたくなにイエスを知らないと繰り返すペテロの焦りや、自らを保身する言動は読者に緊迫した状況がよく伝わる書き方である。ペテロはイエスのことを心配しながらも、今度は自分が捕らえられるのではないかという大きな不安が入り混じっている。

2つ目に、「昇天と聖霊降臨」というテーマで、使徒言行録1章～2章を取り上げている³⁾。場面は、イエスが十字架にかかって死んだ後、復活して40日目を迎えた日である。突然、イエスは弟子たちの前に現れ、世界中に出て行ってイエスの復活を宣べ伝えること、間もなく聖霊が弟子たちのところにやってくるだろうと、これから起きることを公言する。

エルサレムでは、小麦の収穫祭の五旬節の祝いが催されていた。突然、イエスを信じる者たちが集まっていた家が大きな音に包まれる。周りの人々は、家の中にいたイエスを信じる信徒たちが外国語で話したり、神を讚美したりしているのを聞いて、「奇跡だ！これこそ奇跡だ！」と叫ぶ。その一方で、信徒たちは単に大声で叫んでいるだけで、祭りの酒に酔っているのだと言う者もいた。そこで家の中からペテロが出てきて、これらの状況は聖霊のなせるわざであると、力強く熱弁をふるう。そして、ペテロは人々に、イエスを信じるならば、新しい生き方を始めることができ、これまでのあやまちを悔い改めて洗礼を受けるならば、誰に対しても聖霊が与えられ、罪が洗い流されると述べる。

この箇所ですべて注目する点は、ペテロの発言におけるイエスがよみがえったということや、聖霊や洗礼という言葉に、人々が信じがたい気持ちをもっているということである。例えば、『ほんとうにあのイエスこそがユダヤの王なのだろうか？』『洗礼だって？中には首を横に振る人もいた。いったいそれがなんになるのだろうか？』が挙げられる。そしてこれらは、登場人物の台詞ではなく、地の文の中に書かれている。ノンクリスチャンの読者が抱くであろう疑いの念を、著者であるシントラーが表現していると思われる。

3つ目に、「ペテロ」というテーマで、聖霊によって力を得たペテロは、よみがえったイエスのことを堂々と人々に宣べ伝える⁴⁾。ペテロは、足の不自由な物乞いの体を起こし、イエスの名によって歩くことが出来るようにさせた。それを見た人々はペテロの起こした奇跡を怪しみ、不思議がる。神殿の長や祭司たちは、ペテロたちの持っている力が非常に妬ましかったため、腹をたて、ペテロとヨハネを3度も牢屋に入れる。しかし、ペテロと

ヨハネ、そしてイエスを信じる者の厚い信仰により、3度とも牢屋から解放されることができた。特に、3度目の際には、牢屋には16人の兵士が見張り役となり、ペテロは鎖に繋がれ、絶体絶命の場面であったにもかかわらず、神が遣わした天使が解放してくれたのだとペテロは民衆の前で語る。ペテロの信仰は人々の心を動かし、聴いた者はイエスを信じる者へと変えられていく。

ペテロは、以前は自分がイエスを3度も知らないと言ってしまったことを思い出し、心を痛めつつも、それらを包み隠さずに皆に語り伝える。そのような正直なペテロの姿が、聴衆の心を打つのだと思われる。

以上のことから、レギーネ・シントラーの著書はペテロに関連する聖書箇所を丁寧に著している。聖書だけでは汲み取ることのできないペテロの宣教の様子や人柄がよく伝わる。そして何よりも、ペテロの話聞いた人々の態度、心境、イエスへの向き合い方は当時の時代だけではなく、現在にも通じることがあるという点を、作者は伝えようとしていると思われる。

<引用文献>

- 1) 柴田智世「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(4) -羊を扱った作品を中心に-」『名古屋柳城短期大学紀要』第41号、p.p. 209 - 211、2019
- 2) レギーネ・シントラー作・下田尾治郎訳『聖書物語』福音館書店、1999、p. 256
- 3) 同上、p. 275
- 4) 同上、p. 281

<参考文献>

- ・キリスト教保育連盟『新キリスト教保育指針』2010
- ・R・V・G・タスカー『ティンデル聖書注解 ヨハネの福音書』いのちのことば社、2006
- ・I・ハワード・マーシャル『ティンデル聖書注解 使徒の働き』いのちのことば社、2005
- ・R・アラン・コール『ティンデル聖書注解 マルコの福音書』いのちのことば社、2004

キリスト教紙芝居を通して聖書の人物を子どもに語る視点とは

- ・大塚和子『こどものこころ』新教出版社、1999
- ・レギーネ・シントラー、加藤善治・茂 純子・上田哲世訳『希望への教育 子どもとキリスト教』日本基督教団出版局、1992
- ・『聖書』新共同訳、1987
- ・太田知恵子『子供たちの明日』日本教会新報社、1978

Perspective of Telling Children About Biblical Characters Through Christian Kamishibai Shows: About Works Dealing with St.Peter

Shibata, Tomoyo*

本研究では、キリスト教の紙芝居を保育に取り入れる際の一つの方向性として、イエスの弟子であるペテロを扱った作品を取り上げた。聖書に基づいた内容の分析と、子どもに語る際の聖書からの福音的な視点を示すことを目的として研究を行った。

その結果、聖書だけでは表現しきれないペテロの言動、心境、人間的な心の内面の動きや変化を、紙芝居は視覚的に生き生きと描いていると思われる。また、レギーネ・シントラーの著書（1999）においても、多くの疑問形が用いられていることは、聖書には見られない特徴であり、筆者の意図が伝わる。

これらにより、読者である子どもがその場面をイメージしやすくなり、ペテロの生き様を聖書の中の物語として捉えるだけでなく、イエスの述べた言葉も含めて、現在も神から語られているメッセージとして読者が受け止める可能性をもっていると思われる。

キーワード：紙芝居, 聖書, キリスト教, ペテロ

